夢追い人列伝
その十二「審判部伝（中）」

初めに

夢追い人列伝その十二は、審判部伝の続編（中編）である。上編では、80年の歴史の前半に当たる、初代齋藤太郎審判長から第 4 代山田隆道審判長までの 37 年間の流れを見てきた。まさに苦難の歴史ともいえる時代であった。中編では、第 5 代小池正夫審判長の時代から第 7 代松本隆志氏までの流れをたどることとする。審判部は大きな転換点を迎え、さらに山口国体をめざして成長・発展を遂げた時代であった。特に、転換の大きな起点となった小池氏には多くの紙面を割いた。

なお、「上編」に続き、審判組織及び組織トップの名称を「審判部」「審判長」に統一し、年度は西暦と和暦の併記で表記していることをお断りしておく。

山口県バスケットボール協会　審判部			
第５代審判長	小池　正夫	1983(S58)年４月～1999(H11)年３月	17 年
第６代審判長	川武　　修	1999(H11)年４月～2005(H17)年３月	6 年
第７代審判長	松本　隆志	2005(H17)年４月～2012(H24)年３月	7 年

第5代　小池正夫氏（1983(S58)年4月～1999(H11)年年3月）

10 年に渡り審判長を務めた山田氏の後を継ぎ、1983(S58)年に小池正夫氏が第 5 代審判長となった。小池氏は、山田審判長時代の 1980(S55)年に A 級資格を取得しており、すでに中国ブロック、全国で活躍していた。その後、1987(S62)年に AA 級（現・S 級）、翌 1988(S63)年に国際審判員へと昇格を果たしている。

山田氏は自身の紀伝の中で、「審判長には、自身がリーディングレフェリーとして全国で活躍し後進を牽引するタイプと、審判員の指導、育成に力を尽くすタイプの二つのタイプがある。両者を兼ね備えられれば申し分ないが、自らは後者だった」と振り返っているが、小池氏はまさしくその両方を兼ね備えた審判長であった。小池氏の功績は、2006(H18)年刊行の「夢を追う　山口県バスケットボール協会 60 年のあゆみ」（以下、「夢を追う」）の中で、「日本リーグ決勝戦などのテレビゲームに再三登場する姿は、県内はもとより全国の審判員にとって目標的存在となった。また、審判長として県内の審判員の心技体に渡る力量向上に努め、山口県の評価を高めることに多大な貢献を果たした。」と記されている。

略歴

1952(S27)年生まれの小池氏が審判を始めたのは、山口高校 2 年生のときである。早稲田大学在学中も学生審判として関東学生リーグなどで活躍し、日本公認審判（現在の日本公認 B 級）を取得している。大学卒業後、帰郷して高校の社会科教員となり、部活動の指導をしながら審判活動を継続し、前述の通り A 級、AA 級、国際審判員へと昇級していっ

た。インターハイ、インカレ、国体、天皇杯など、全国大会の決勝の笛は数知れない。B リーグの前身である日本リーグや JBL でも活躍し、高い評価を受けた。1998(H10)、1999(H11)、2001(H13)年の三度にわたるリーグ最優秀審判賞受賞は、いかにコーチや選手から信頼が厚いレフェリーであったかの証左である。また、国際審判員としては、1991(H3)年のジョーンズカップに始まり、10 数回にわたり海外の大会に参加している。最後の舞台は、2001(H13)年北京で行われたユニバシアードの男子決勝中国対スロベキアであった。小池氏は、押しも押されもせぬ日本のトップレフェリー、いや「世界のコイケ」であった。山口県の審判長を退いたあとも、2000(H12)年 4 月から 3 年間にわたり日本バスケットボール協会規則審判部副部長の重責を担い、日本全体の審判のレベルアップに貢献した。

1996年フィリピンで行われたアジアクラブ選手権で、現地スポーツ紙の表紙を飾る小池氏(小池氏提供)

山口県の指導体制

小池氏は、県審判長として指導制度のシステム化に意欲的に取り組んだ。県全体を 3 ブロックに分け、東部の責任者を廣田修造氏、中部は小松徹氏（三田尻女子高。現・誠英高）、西部が有澤弘行氏（プロレフェリー重行氏の御尊父）と、3 氏による分担制を取り入れるとともに、精力的に各種審判講習会や研修会を実施し、審判技術の向上と審判員養成に努めた。講習会には中央から国際審判員の中野幸一氏を毎年招くなど、自身のネットワークを最大限活用して、システムを改革していった。その結果、1988(S63)年に廣田修造氏、1990(H2)年に川武修氏、1993(H5)年に松本隆志氏と、A 級審判が次々と誕生した。松本氏は 1997(H9)年にはさらに AA 級へと昇格したが、東京に転勤となった。松本氏に続けとばかり 1998(H10)年に若い髙木直樹氏と多賀谷豊氏が A 級に昇格した。松本氏は 2000(H12)年に山口県 2 人目の国際審判員への昇格を果たし、2002(H14)年に再び山口県に戻ってきた。

審判の地位向上

1991(H3)年に山口県高体連機関誌「南風」に掲載された小池氏の長文「'91 ジョーンズカップに参加して」は、氏の国際審判員としての初の海外遠征の報告書であり、紀行文である。随所に氏のバスケットボールへの熱い想いが込められている。記述された内容には、現在のバスケットボールに通じることも多く、30 数年も前の氏の先見の明には、改めて驚かされる。

上記寄稿文には、バスケット先進国に比べて審判が軽視されていた国内の状況を嘆く件(くだり)がある。氏には、審判の地位向上への強い思いがあった。審判は、決して指導者（コーチ）の下に位置するものではない。もっとリスペクトされてしかるべきものである。この思いから、判定に圧力をかけようとする指導者（コーチ）には毅然とした態度で向かい合った。

一方、審判料の増額や、大会時の宿舎を旅館の大部屋からビジネスホテルのシングルに変えるなど、対偶の改善にも氏は心を砕いた。

最近、サッカー日本代表が海外でロッカールームをきれいに片付けて帰国したことが話題となることがあったが、小池氏は大会が終わると審判控室を整理整頓して会場をあとに

することを当たり前のように実践していた。その姿を見て若い審判が真似ないわけがない。

アイデアマン

小池氏は、アイデアマンでもある。よいと思うものは積極的に取り入れる進取の気性に溢れていた。ジャンパーやポロシャツなど、レフェリーアイテムを作り始めたのもこの時代である。これらの取組は審判員としての誇りと仲間意識の醸成に一役買った。審判部で揃いのブレザースーツを作ったこともある。また、暑い夏期のゲームでは、半パンでの審判も可とした。近年導入された、T シャツと半パンのセカンドユニフォームの先駆けである。

こんなエピソードがある。日本に正式に 3 人制の審判が導入されたのは 2001(H13)年のことだが、それよりはるか以前の 1995(H7)年の山口県高校総体の男女決勝で、3 人制審判を行ったのである。小池氏がアメリカの大学の 3 人制のマニュアルに沿って講習を行い実施にこぎ着けた。小池氏は、単に奇を衒(てら)ったわけではない。2 人より 3 人で視野分担をした方がより適確にプレーを見極めることができ、それは結局プレーヤーの利益につながる。この信念に基づいての実践であった。結果的に、小池氏はルール変更の先取りをしていたわけだが、3 人制実施の事実を知った日本協会にこっぴどく叱られたという後日談も聞こえてきた。

「先取り」と言えば、こんな逸話も残っている。かつて、ディフェンスが近接して 5 秒オーバータイムが宣せられると、ジャンプボールで再開されるというルールだった。そんな時代にとあるゲームでその場面に遭遇した小池氏は、「5 秒！白ボール！」と宣して、相手チームにスローインを与えたのである。小池氏の勘違いだったのだが、堂々としたコールに異を唱える者は誰もいなかった。後年、「5 秒オーバータイムはスローイン」が正式なルールとなったとき、「それ見ろ。俺には先見の明がある！」と笑い飛ばしたものである。

スーパーマン

小池審判長の時代は 17 年にも及んだ。期間の長さもさることながら、卓越した技術を擁し世界で活躍しながら、豊かな人間性とリーダーシップで山口県を牽引し続けたその姿は、まさしくスーパーマンであった。「スーパーマン」故の他人にはわからない苦労もあったに違いないが、決して表に出すことはなかった。

小池審判長の時代に、山口県の審判界はそれまでの苦闘の時代から成長・発展の時代へと大きく転換したのである。

第6代　川武修氏（1999(H11)年～2005(H17)年）

17 年審判長を務めた小池氏が後を託したのは、実業団の川武修氏であった。川武氏は高校を卒業してすぐに実業団の笠戸船渠(ドック)（下松市）でプレーヤーとして活躍し、国体にも出場した。20 代後半から本格的に審判に取り組み、36 才で A 級を取得した。その翌年には小池氏から乞われて副審判長となり、小池氏を支えていた。

審判長となった川武氏は、小池審判長時代に構築された審判部の組織や若手審判の発掘・育成の仕組みの充実・発展に注力した。川武氏は、周囲への感謝を以下のように語っている。

この時期、審判部の先輩でもある小松徹氏が県協会の理事長を務められており、審判部へ暖かい理解を頂いた事は心強かった。また、事務局長の澄川雅士氏には予算・支出の手続き等で細かな指導と配慮を頂いた。そして副審判長として私を支えてくれた、松本隆志氏、奥野忠氏、小坂祐三氏、高木直樹氏の存在は大きな力となった。ルール改正時の伝達資料の作成のために皆で夜間に集合し、何日もかけて作業した事が懐かしく思い出される。大会の審判割当てや講習会の指導、ブロック大会や全国大会での活動など、多くの仲間の助けを得て何とか役割を全うする事が出来た。

川武審判長のもと、1999(H11)年には渡辺博史氏と叶太氏がＡ級に昇格している。東京に転勤した松本隆志は、2000(H12)年には国際審判員へと昇格した。

2001(H13)年１月７日は、山口県審判部にとって歴史的な日となった。東京で行われた皇后杯・全日本女子総合選手権決勝ジャパンエナジー対シャンソン化粧品の主審は小池正夫氏、副審は松本隆志氏。日本一を決めるゲームが、山口県の 2 人の審判に委ねられたのである。松本氏は、そのときの感激を高体連機関誌「南風」に寄稿している。

平成13年１月７日　全日本総合選手権大会　女子決勝
主審　小池正夫氏　副審　松本隆志氏　（松本隆志氏提供）

その松本氏が 2002(H14)年に再び転勤で山口に戻り、川武氏を支えたことは、誠に心強いことであった。

川武氏は、審判長を松本氏に託したあと、2007(H19)年に県協会理事長（法人化以降は「専務理事」）に就任し、2018(H30)年までの 11 年に渡って県協会全体を牽引した。この間、協会の法人化、山口国体という大事業を成功裏に成し遂げた。また、中国実業団連盟理事長を長く勤め、実業団組織を牽引した功績も大きい。

川武氏は、これからの審判員に、以下のように檄を飛ばしている。

現在、審判員への伝達や指導は情報網の発達により迅速且つ的確に行なわれる時代となって来た。また、３パーソン制も確立され、審判としての約束事も大きく変化している。しかし、何時の時代になっても判定の基準は変わらない。プレーの見極め、決断、そしてゲームコントロールの重要性は不変である。コート内外での行動や発言にも大きな責任が求められると思う。ゲーム後の謙虚な反省と次へのチャレンジを怠ってはならない。

現在審判活動に従事されているベテランや中堅の方々は勿論、これから日本公認Ｂ級やさらに上級を目指している若い諸君には、プレーヤーとベンチ、そして観衆に信頼される審判員になるよう頑張って頂ければと思う。

第7代　松本隆志氏（2005(H17)年～2013(H25)年）

2005(H17)年、松本隆志氏が川武氏の後を継いで第 7 代審判長となった。松本氏は、社会人になって、高校の外部コーチの傍ら審判活動を始め、みるみるうちに頭角を現し、日本公認、そしてＡ級を取得した。1997(H9)年、AA 級昇格と同時に東京へ転勤となった。

山口県にとっては大きな損失だったが、松本氏はハイレベルのゲームを吹くチャンス恵まれる都会の地の利を最大限生かし、実力を高めていった。そして、小池正夫氏に次いで山口県二人目の国際審判員となり、帰ってきたのである。

2005(H17)年と言えば、山口国体がおぼろげながら見え始めた時代であった。そこに照準を合わせるかのように、2004(H16)年には有澤重行氏がＡ級に昇格しており、2 年後の2006(H18)年には、重行氏のパートナーである有澤優子氏が山口県初の女性Ａ級審判になった。重行氏はその後、2007(H19)年に AA 級、2008(H20)年に国際審判員へと昇格した。

この時代、実はもう一人彗星のごとく現れた国際審判員がいる。山口大学の学生だった大山直輝氏である。2010(H22)年にＡ級になると、翌年 AA 級、その翌年国際審判と、トントン拍子で昇級し、当時国内でもっとも若い国際審判になった。ただ、その後に国際審判の人数枠が絞られたために国際審判をはずれ、短期間の活動に終わってしまったことは誠に残念であった。

女性審判では、山口国体の年に米村悠美氏が女性二人目のＡ級になった。有澤優子氏と米村氏は、ともに上級昇級後に出産・子育てを経て活動を継続している。周囲の協力もあってのことではあろうが、本人達の努力に賛辞を送りたい。

山口国体に向けての審判員の養成は、3 年前の 2008(H20)年にスタートした。国体前年の2010(H22)年には、国体プレ大会として全日本教員大会が開かれ、審判の研修にも拍車がかかった。3 月に東日本大震災という未曾有の大惨事が起きた年に行われた山口国体は、大会名に「東日本大震災復興支援」という副題が添えられた。結局、山口県からは、34 名（男子 27 名、女子７名）の審判が参加した。松本隆志氏が成年男子の決勝を、そしてすでに国際審判となっていた有澤重行氏が少年女子準決勝の笛を担当している。

松本氏は、山口国体を振り返り、次のように述べている。

山口国体　審判従事者（順不同、敬称略）

上級審判員7名

松本隆志	有澤重行	高木直樹	渡邊博史
有澤優子	大山直輝	米村悠美	

日本公認B級審判員27名

松本　理	樋口道典	伊藤秀明	重政由佳里
上田良樹	島本智江	藤本久志	河村正夫
弘中　勤	藤井正則	中村秀昭	内田昭紀
烏田敏典	高橋正樹	野口祥寛	網屋みちる
勝原芳徳	広崎博之	平田一昌	藤田　薫
石原大資	笹田知延	若本泰徳	長田磨江香
松冨仁美	佐竹俊春	羽村和大	

山口国体に向けての審判養成は、当初35名の日本公認B級審判員でスタートしました。全国大会のコートに立って審判したいという強い気持ちを持って、毎年4回の講習会(内1回は、JBA講師を招聘)に臨んで頂きました。国体に従事できる山口県審判員の数的な制限はありませんでしたが、やはり全国大会であることから、一定のレベル以上の力量が必要であり、実技審査においてJBA講師の評価での合格が必要となります。最終的には、34名の審判員が参加を果たすことができました。

振り返ってみると、全員国体に向けて必死な想いで審判技術の向上に取り組んでいたと思います。審判長として、達成感や危機感を促すつもりで、講習会毎に候補者のランキングをして公表していました。今にして思えば大変失礼なことであったかと思いますが、ランキング上位には年齢の高い審判員が多く並んでいたように記憶しています。彼らが我武者羅に取り組み、若い審判員の心の支えや相談相手となり、全体を引っ張ってくれたお陰で、多くの審判員が、山口国体に従事することができたと思っています。

また、全国教員大会、山口国体と2年連続して全国大会を恙なく運営できたことは、コート外においても審判部一丸となって、それぞれの役割を精力的に果たしてくれたお陰であり、皆さんに心より感謝を申し上げたい。中でも、国体の前日に防府『松月』で開催された審判員懇親会での当時副審判長であった松本理氏の才能溢れる名司会ぶりは、一生忘れることは無いと思います。

---------- ----------

続く下編では、第 8 代渡邊博史審判長以降、第 12 代の現・坂本幸一審判長に至るまでの激動の時代をお伝えする。併せて、審判に深く関わるテーブルオフィシャルズの歴史についてもお伝えする。

［文責：顕彰事業委員会］

【コラム】ルールの変遷　その 2（平成・令和の時代）

審判部伝（上）のコラムの続きである。ショットクロックが短縮され、ゲームはよりスピーディーになっていった。

1991(H3)　ベンチエリア設置
フリースロー選択の権利（※）を廃止
スローインはバックコートのバイオレーションでも手渡し

1995(H7)　1and1のフリースロー廃止。チームファウルペナルティは2スローに
インテンショナルファウル廃止。アンスポーツマンライクファウル導入
得点後以外でもエンドラインからスローイン
TOのメンバーにアシスタントスコアラーを明記

1999(H11)　最後の2分は得点後に時計を止める

2001(H13)　3人制審判を導入
競技時間を20分×2から10分×4に。チームファウル制限は4回に
ショットクロックを30秒から24秒に
フロントコートまでの制限を10秒から8秒に

2004(H16)　一般・高校女子のボールは7号球から6号球に
オルタネイティングポゼッションルールを導入

2005(H17)　前半に攻める方向が相手チームのベンチ側であることが明記された
12面体球を導入

2011(H23)　3ポイントエリア50cm拡大。制限区域が台形から長方形に。
ノーチャージ・セミサークル設置
ショットクロックに14秒リセットを導入

2018(H30)　主審は「レフェリー」から「クルーチーフ」に

2023(R4)　前半に攻める方向が自チームのベンチ側に変更
スローインファウル導入

※ これ以前は、フリースローが与えられたチームには、フリースローの代わりにスローインを選択する権利が与えられていた。当時「ファウルゲーム」という戦術は、あり得なかったのである。